

次期衆院選に向けて水面下で進む「地殻変動」は、まずはウワサとなって広まります。ウワサはいつまで本当なのか。「選挙 ウワサの真相」を追います。

民主党が議席を独占する都道府県が続出するのか。年内に行われる次期衆院選をめぐるこの「ウワサ」。

最大の特徴は、眞実味を補強する材料が次から次へと出てくることだ。

例えば北海道。

全国で自民が296議席を

獲得した前回平成17年の「郵政選挙」です。北海道では12選挙区中、民主が8議席を取った。

その後は何があったか。

自民党は北海道7区(釧路市など)に前釧路市長を担ぎ出したが、その後益々選ぶ釧路市長選では、同党支部が2人を同時に推薦するドタバタを演じた。

さすがに自民党元幹事長の武部勤の選挙区(北海道12区)の中心的な都市、北見市の市長選(昨年12月21日投票)では、自民の支援する前市長が、民主党、新党大地が共に推す候補に敗れた。

札幌市豊平区の民主党候補時代は過ぎ去り、左派色は薄まつた。『混成部隊』と揶揄された時代は過ぎ去り、左派色は薄まつた。

予定者の後援会事務所にも、「北海道制覇」という言葉が熱気になって充満していた。

元職、荒井聰の事務所。主婦たちが支援者への封書の発送を続けていた。炭鉱労組や官公労が強く前回民主党が4敗した選挙区の一つだ。

透は、自身も社会党支持だった。だが今は「勝利のためには、保守層の切り崩しが欠かせない」と語る。

「社会党に愛着を持つ支持者の中には、自民党幹事長だった小沢一郎代表へのアレルギーが強い者もいる。だが、現実に政権を取るのは民主。今は『民主で政権を取る』という意識でまとまっていいる」。桑原が掲げるのはイデオロギーではなく、政権奪取という現実論だ。

荒井後援会は、典型的な保守層とみられてきた町内会長や企業へも足を運ぶ。「会っててくれるようになつた。支持の幅が広がっている」。桑原は胸を張る。

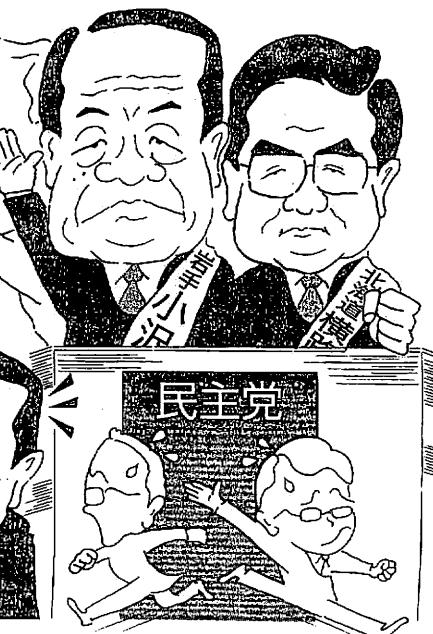
新潟もの「ウワサ」の絶えない県の一つだが、民主党が自民党に対し直接手を突つ込んでいるかのようにみえるのが特徴だ。

昨年12月20日。民主党の新潟県連大会。「次期衆院選で田中家の支援を得るために、平成22年の参院選は(自民党を離党した)田中直紀参院議員を民主党公認にすべきだ」。出席者の何人かがこう発言した。直紀は無所属で民主党と

# 現実論が「王国」加速させる



## 「民主独占の県が続出するらしい」



イラスト・筑紫直弘

自民党は政党の体をなしていない」とまでいう。「時代に対応できなかつたのではないか」という言葉も口を出た。岩手では平成19年4月の統一地方選で、県議会の過半数に迫る22議席を民主党が押さえ第一党となるなど、すでに山を動かしてしまった。自民という存在に「過去の遺物」というレッテルを張ろうとする。前回衆院選では4選挙区中、3選挙区を民主党が押さえて、自民は2区の鈴木俊一が孤高を守っているにすぎない。それすら「いま選挙なら2区も危ない」「景気が上向くべきで、国民の信頼を少しでも

対する自民党から聞く」とてくるのは「新潟県選出の自民党国会議員が地盤沈下した」(県連関係者)といふ嘆きいつぶした」。自民党県議は指摘する。

「(この)でも、角栄という一つの「現実」が、有権者を民主党に向かわせる。

小沢氏のおひざ元、岩手県は、北海道、新潟のさらに一步先を行く。

民主党政岩手県連で幹事長を務める佐々木順一は「すでに

取り戻すまで選挙を先送りすべきだ」。自民党政は日々に言つ。

とりひで、愛知も民主党の牙城といわれる」とが多いが、北海道、新潟、岩手と日本が多い。民主党の勢力は「東西低」か。

民主党幹部に聞くと「(東日本は)薩長という政権側でなかつたため、昔から経済が疲弊していた。農民運動も強い。伝統ないし、社会党も強い。伝統なんじゃないか」と返事が返ってきた。

川祐司、水内茂幸、齊藤太郎、金子聰

敬称略

## データBOX

特定地域での民主党の優位は「比例代表」の得票をみるとわかりやすい。

北海道では、平成15年の前々回衆院選では、自民87万票に民主115万票と、民主が28万票差を付けた。自民が圧勝した前回17年衆院選でも自民94万票に民主は109万票で15万票差。民主が第一党となった19年参院選となると、自民72万票に民主121万票と、差は50万票にも広がった。

新潟も岩手も同じ。19年参院選でみると、得票率の差は、新潟が15.4%、岩手は32.4%。それぞれ民主党が自民を引き離している。「民主王国」恐るべしである。

(随時掲載します)